しんらん同人

NO、511
12月号
二〇一三年十二月一日発行　郵便番号171-0052
発行所　東京都豊島区南長崎一の三の八　誓願寺
TEL　3950　7828　FAX　3950　6820
mail　SEIGANJI@RESET.JP

# 悩み多し徳多し

幸福を願わないものはいない。だが幸福とは、なんであろうか。

まず幸福とは一人ひとり自分自身が感ずるもだからなにを幸福と思うか、それはその人その人によって違う。

では何を幸福と感ずるかを考えてみると不安がないこと、悲しみや苦しみにあわないこと、自分の思うようになることではないだろうか。自分の思うようになるということは、自分の欲望が満たされるということ。その欲望も色々あるし、限りなく起こってくるものだから、それを一つ一つ満たしていく事は大変なことである。

仏立像　Standinng Buddha
インドのサルナートでは、5世紀以後ブグダ朝古典様式の流れを汲んだ仏像が盛んに製作された。
（ベルリン　インド美術館）

長生きしたい病気になりたくない、健康でありたい、金持ちになりたい、家内中円満に暮らして生きたいと思っても中々そうは行かない、そこに苦しみがあり、悲しまずにはおれない。

「人間は重い荷物を背負って歩いている」といった人がいる。仏教ではこれを「業」といっている。人間に生まれた事も、良いことも悪い事も、すべて業だといわれる。これらは自ら作り出したものであって、他人の介入を許さない。重い荷だからといって他人に背負わせる事もできない。捨てる事もできず、自分自身で背負っていくより外仕方がない。この重い業を背負っている姿が、迷いの世界である。生死の世界である。

「いづれの行もおよび難き身なれば地獄は一定すみかぞかし」

どうしても、そこから逃れる事ができない、地獄ゆきである。

「いずれの行にても生死を離るることあるべからざる」この身、あわれみたもうて「救わずばやまぬ」との願いを起こされ、それが仕上げられたのが南無阿弥陀仏である。

どうしようもない、この私を哀れみ給い、摂取して捨て給わぬのである。大悲の光に照らされ、遭わせていただくと

罪障功徳の体となる、氷と水のごとくなり。氷多きに水多し、さわり多きに徳多し

という世界が開けてくるのである。悲しみや苦しさから逃れようともがくのではなく、その姿をわが身の業と感じ、素直に受け止め、かかる者を救いたもうお慈悲の中と知らしめられるとき、悲しみも苦しさも転じて「おかげさまで」と念仏申されるのである。

病苦であろうと、貧苦であろうと、その中に生き抜く力となるものこそ念仏なのである。そこを「念仏は無碍の一道なり」といわれている。南無阿弥陀仏

# 前住の法話

## 何千何億の財産

先日ある資産家の夫人が主人を失って、その遺産相続の悩み多い話をうかがった。続々と親せきと名のる人が出て来て財産のわけ前を要求するそうである。

「有田憂田」の聖語の通りである。田即ち財産があれば財産のために心をわずらわさねばならないというのである。田（即ち財産）がなければ田を欲しくて悩む、あればあるで悩み、なければないで悩み苦しむ、あってもなくても悩みにかわりない。

父母が亡くなった時、相続する遺産など一文もなかった。家もなし、土地もなし、金も一円も無かった。だから相続税など考えることもなかった。

まもなく戦場に引き出され、シンガポールから引き揚げてきたときには着の身着のままであった。何もないということは苦しいことであるが、それだけ他人の世話になっていないということ

親から譲られたものは何もないか考えてみると、とんでもない。一番大事なものを頂いている。財的な物質的な遺産は一つもなかったけれど、一番尊い財産を頂いている。まず、この世に生を受けさせて頂いたことである。「人間に生れたことは上々の因縁による、人間に生れても、仏法に遇わなかったら、かれ木が春にあわないのと同じて、今仏法に遇い、真宗の教えを聞く身になったことは、喜びの中の喜び、これに比べられる喜びがあろうか。」

と先哲のおことばにあるが、最上の財産、南無阿彌陀仏のみ名を称うる身にしていただいたのは、全く両親のおかげである。

南無阿弥陀仏は「無価の宝」だといわれる。無価とは値段がつけられないということである。何千何億の財産もおよばない値打ちのあるものが南無阿弥陀仏である。

この財産は命終わるまでなくなることは無く、利子は増えるばかりである。自分で保管した方が、持ち歩く事も無く、向こうからついて回ってくださるのである。否、その中から出られないように仕上げられてある。うれしいときも悲しいときも、いつでもお念仏である。命終わるときがどうであろうとも、そのままお浄土へ生まれさせていただくのである。こんな尊い遺産を頂いていながら、親のご恩は忘れ通しである。まことに申し訳ないことである。

## 質疑応答

**問** 主人の遺影が気に入りません。お葬式で使用したもの以外のものを飾っても良いでしょうか。

**答え** 遺影とは故人の生前のお姿が彷彿と偲ばれる写真が望ましいのであり、そのご遺影が気に入らないということでしたとにこだわらずに、どうぞ別の写真をお飾り下さい。

よく紋付や礼装姿のご遺影を見かけることがありますが、お若い人には堅苦しく思い馴染めないかもしれません。また、長い期間、病院に入院されていた人の場合、近影がないというこで団体写真の中のお顔を取り出して着せ替え人形のように、礼装に描いたものに顔をつけて遺影としている場合もありますが、何かその人の人生が暗示されて寂しい気がします。どうぞ、あなたのお好きなご主人の写真をご遺影としてお飾り下さい。

気にいった写真があったら少し大きく伸ばしておいて、身近な人に「もしもの時には、この写真を飾って」と言いおくら

いの心掛けが大切です。

あなたも何か嬉しいことのあった時とか、ご自分から見てよい心境の時に撮った写真を大きめに伸ばして額にでも入れておくとよいでしょう。白黒にこだわらず、この頃はカラーの普段着の写真も印象的で良いものです。

いくらご自分の気にいった写真でも何十年も前の若い頃の写真というのはどうかと思います。あなたのお気に入りの、あなたらしいお写真をお手元において置くことをお勧めします。

誓願寺ではお参りした方の写真をとっています。その時一言いってください。遺影の写真にするように撮影します。

**問**　仏壇へのお供えに、今は亡き我が子の好んだハンバーグをあげても良いのでしょうか。また、あげたご飯やお供え物は食べても良いのでしょうか。お供えする時間や向きについても教えて下さい。

**答え**　この質問にはいくつか異なった問題点が重なっていると思います。まず仏壇ですか、仏壇はその家の代々のご先祖さまをお祀りするところであると思われがちですが、本来、仏壇とは、仏教徒である私たちが信仰の対象として、「心のよりどころ」として、ご本尊を安置するところと考えるのが正しいと思います。そして、菩提寺のご住職を通して、お釈迦さまの弟子にしていただいた（お位牌などに書いてある戒名・法名は、お釈迦さまの弟子になった証の名前です）ので、師匠であるお釈迦さまのおそばに位牌を安置してあげるのです。

そこで「子どもの好きだったハンバーグをお供えしても良いですか」という質問には親御さんの心情をくめば必ずしも「NO」とはいいきれないのではないでしょうか。こういった質問が出てくる背景には、仏前には肉の食べ物は殺生物だからダメ、精進料理でなくてはいけないといった仏教の伝統があるからだと思います。

「殺生」とは何でしょうか。生きているもの、生命あるものを殺すことだけが「殺生」なのでしょうか。また、動物や魚だけが生きものなのでしょうか。大根や人参、白菜から山の木々、草花まで、この地球のありとあらゆるものに生命があるのです。その証拠に私たち人間は、これらの生命をいただくことによって、自分の生命にかえ毎日を生かされています。つまり「殺生」とは、この大切な大自然の生命を無駄にするなということです。必要なだけいただいて、必要以上に自然の生命を殺すな、無駄にするなということです。

「お仏壇に肉食物はダメ」といわれる理由の一つと思われることがあります。それはお釈迦さまや歴代のお坊さん方が修行する時に、身心の不必要な欲望を抑えるために、精力のつく肉食を断ったことからきているようです。しかしながら、先に亡くなったお子さまの霊前に、生前好物だった食べ物をお供えしてあげるという、親の子を思う気持ちは尊いものがあります。もしこの亡くなったお子さまに兄弟がいたとしたら、その親の姿を見て、本当のやさしい心のあり方を知るでしょう。そして、その心のやさしさは子から孫へと受け継がれてゆくにちがいありません。修行中のお坊さんが夕食を食べないことから、朝か昼にお供物やお膳を供える習慣もあるようですが、おいしいものを作ったときや故人の好物を作ったとき、お供えするのが良いと思います。

## 釈尚文 独り言

「あなたは　あなただから　かけがえがない」お寺の前に掲げた週間標語？で、私の好きな言葉です。

師走を迎え、皆様方にはいかがお過ごしでしょうか。

三月に上京いたしました私にとりましては、初めての本格的な冬となりますので、寒さには強いと自負していますが、厳しい寒さを覚悟している日々です。

さて先日、誓願寺元住職　故岡本泰雄の法話を手にすることができました。岡本泰雄六四歳の頃のもので、昭和四十八年故久野俊子さまの十三回忌法要時のお話です。

およそ四〇分くらいのお話なので、しんらん同人に転載するには無理ですが、お寺にお参りの折に、ご希望の方にはコピーをお渡ししたいと準備致しておりますお申し出下さい。

新しい年を迎える準備や課題が山積いたしておりますが、皆様方のご意見を伺いながら形を作りたいと考えています。ご協力をお願いいたします。

### 十二月御法座案内

八　日（日）午前十時　聖典講座
　　正午　健康相談
　　講師　佐藤公彦医師
十五日（日）午前十時　なかよしくらぶ
十七日（火）十一時　歎異抄の会
廿二日（日）午前十時　聖典講座

葬儀　法事等についての考え方が、極端に変わってきています。亡くなったら、遺体を火葬場にもって行き、後で知人とパーティー開いて終わり。

そこには故人を偲び、生前のご恩を思うというような気持はありません。最近は震災以後「絆」という事が、特に強調されるようになってきましたが、目の前のことだけで、いのちをいただいたご恩、目に見えない大きなご恩など考えることもないのが実情です。亡くなった方のご恩を思うこともなく闇から闇に葬ってよいものでしょうか。

生きているうちに、あなたの納骨仏壇を用意しませんか。核家族となり、親子の関係もだんだん変わりつつあります。安心して生きてゆくために準備が必要です。

通夜葬儀等も終わり、さてお墓に収めようと思っても、昔から東京在住の人は困りませんが、新しいお墓を作ろうと思っても、何百万と掛かり困っている人が多くいます。

その方々のために「新しい納骨仏壇」を設置いたしました。

## 編集後記

◎報恩講厳修のため本堂、納骨堂、庫裏と同行と一緒に大掃除をして、法要を迎えた。

◎身体の調子も徐々にではあるが、まともになりつつある。ただよく考えてみると、私も七十九歳、八十が目の前に来ているあと何年生きられるだろうか。気持はあせるがどうしたらよいか見当がつかない。ただ目の前の事を精一杯やるしかない。

◎平成二十五年も終わる。今頃になって、前坊守がなにかにつけて、気を使ってくれたので大した問題もおこらなかったが、思うとよくやってくれたと今頃になって反省する。有難うと言おうと思っても本人はいない、全く寂しいし、つらい、もう遅いのだが、致し方ない。写真に向かって何を言っても返事は返ってこない。自分の女々しさにあきれかえる。

◎平成二十六年は新しい気持で迎えたい。